

生涯学習機会としての大学公開講座

— 経営的視点からみた大学公開講座の現状 —

高橋 一夫

(佛教大学非常勤講師)

抄 録

今日、生涯学習機会を広げる様々な取り組みが、都道府県や地方公共団体、大学などで盛んにおこなわれている。しかし、生涯学習機会が充実しても、なお学習機会に参加できない潜在的な学習者の存在がある。学習機会への参加を阻害する要因には様々なものが考えられるが、そのひとつに、生涯学習機会に関する施策が、学習者の自己決定の上に成り立っているとはいえない、という問題点がある。そのような生涯学習機会のあり方に関する問題には、大学における公開講座の問題があげられる。大学は公開講座を通して、地域社会の知的な発展に貢献するという理念を持っている。しかし、昨今の大学を取り巻く状況、とりわけ私立大学の現状から考えると、理想を追求するあまり採算を度外視したような公開講座の運営は不可能といえる。近年の学生獲得競争の激化から、大学は公開講座を大学淘汰の時代を生き抜く戦略のひとつとして捉え、学生募集の一環として考える傾向にある。つまり、大学公開講座の採算性が重視されているのである。では、その実態はどのようなものであろうか。本研究は、大学公開講座の現状を、経営的な視点から分析することで、大学の意図するような投資効果があがっているのか否かを検討する。加えて、大学が公開講座を経営戦略のひとつとして捉えることから生じる問題点についても検討したい。

キーワード 生涯学習機会、経営的な視点、グローバルとローカル

1. 本研究の目的

1990（平成2）年に生涯学習振興法が施行されてから、すでに12年が経過しようとしている。その間、各都道府県や地方公共団体、大学などが生涯学習を推進すべく、様々な取り組みを行ってきた。その中のひとつに、大学公開講座がある。大学はそれまで培ってきた研究の蓄積を、公開講座を通して地域社会に還元し、地域社会がもつ知的な要求に応えようとしている。学習者の多様で高度な学習ニーズに応える学習機会として、非常に期待が持てるもののひとつである。そして、その利点は、公開講座を通して地域と大学の結びつきが強化できるという点である。そのため大学は、多くの場合において、社会的なニーズに応えるサービスという捉え方で、公開講座を開講してきた。

しかし現在、日本の大学を取り巻く状況は厳しい。18歳人口の減少期に伴って、大学間の学生獲得競争が激化している。いわゆる「冬の時代」を迎えた大学においては、各大学が競って特色を打ち出しながら、学生募集に力を注いでいる。また、大学進学を考えている受験生の立場から見れば、少しでも魅力ある大学、自己実現できる大学に進学したいという希望がますます強化されている。大学の特色をより一層アピールしなければ、学生を獲得できないという時代の流れは私立大学だけに留まらない。国公立大学も独立行政法人化を背景に、大学再編の動きが活発になるにつれて、その傾向を強化している。そのため、学生獲得競争は国公立大学をも巻き込んで、今後ますます厳しくなることが予想される。

このような状況下において、私立大学では経営という視点から、大学における取り組みの再構築をしなければならない状況にある。公開講座についても例外ではない。過去において、「大学のPRになればよい」とし、採算を度外視したような公開講座の運営はもはや不可能になっている。言い換えれば、例え学習者のニーズに合致したものを提供できたとしても、大学の経営にとって負荷がかかりすぎる講座は継続できないということである。そのため、経営的な視点から公開講座を考えた場合、どのような種類の公開講座にどの程度の学習者が集まるのか、その講座の採算性の分析、また、どの講座の履修者から、当該大学への社会人入学や編入者があるかなどについても分析が必要といえる。つまり、大学公開講座は、地域の学習ニーズに応えると

いうだけでなく、将来的な入学者の確保という経営戦略の一端を担わされているのではないか、ということである。

では、実際に大学公開講座は、大学淘汰の時代を生き抜く戦略のひとつとして、十分な投資効果があがっているのだろうか。本研究の目的は、大学公開講座の投資効果を測ること、言い換えれば資本生産性の測定であるといえる。加えて大学が、経営的な視点から公開講座を捉えることで生じる様々な問題点も明らかにする。

2. 本研究の概要

本研究は、2000（平成12）年7月に実施した、神戸市に所在する私立K大学生涯学習センターによる「生涯学習機会への参加に関する調査」の分析を基にしている。本研究でK大学の公開講座を分析の対象とした理由は、大きく次の5点であるといえる。①公開講座の参加者の多くが、大学所在地周辺地域の住民である。②在学生の多くは、大学所在地周辺地域の出身者である。③そのため、地域との結びつきが非常に重要な課題である。④学生募集に関して、周辺地域に競合する大学が多い。⑤ライバル校が多いため、他大学との差異化が最重要課題である。これらは、日本の私立大学の多くが抱えている共通の課題といえる。また、公開講座に関しても、共通の課題を持っているため、得られた分析結果にある程度の一般性が見出せると予想されるためである。

当該調査は、K大学の直接的な通学範囲である神戸電鉄沿線の中から、神戸市北区、西区、長田区（鶴越・長田駅周辺地区）、小野市、三木市の人口（平成11年度『兵庫県県政要覧』）の1%をランダムサンプリングによって抽出し、「質問紙郵送法」を用いて調査した。有効サンプル数は532、回収率は13.3%であった。サンプルの基本的な属性は、年齢が「29歳以下（9.4%）」「30～39歳（13.4%）」「40～49歳（21.6%）」「50～59歳（27.9%）」「60～69歳（20.8%）」「70歳以上（7.0%）」（回答数501）であり、性別が「男性（24.1%）」「女性（75.9%）」（回答数506）であった。なお分析には、調査統計パッケージSPSSを用い、表計算ソフトExcelによって表・グラフの作成をおこなった。

3. K大学における公開講座の概要

K大学の場合における公開講座開設の目的は、K大学の母体である学園の創立から111年、そして、大学自体の創立から32年を経て、教育研究の伝統と知識の蓄積を社会に還元し、地域の人々のニーズに応えたい、地域に愛され、地域社会と共に発展していく大学でありたいため、と生涯学習センター設置主旨に述べられている。

公開講座については、生涯学習センターが1997年に設置される以前からも断続的に開講している。K大学の公開講座の歴史をみると、1968（昭和43）8月に夏季婦人教養講座を開講、1973・74（昭和48・49）年に神戸市民会館にて「生活と学問」、北区総合文化センターにて「現代社会と学問」を開講、1982（昭和57）年7月に運営委員会の設置、1983（昭和58）年9・10月に土曜公開講座の実施（以後継続）、1986（昭和61）年9・10月に土曜公開講座を県農業共済会館で開講、1989（平成元）年には大学構内の学生会館を中心に実施、1997（平成7）年4月、生涯学習センターの発足となっている。

4. 調査分析

表1は、公開講座の充足率の一覧を表している。それぞれ、1998～2000年度の講座名および定員数、受講者数、充足率を示している。表2は、1998～2000年度のそれぞれの講座を充足率の高いものから順位付けし、3年間の順位の平均値が高いものから順に並べたものである。

この表2からみると、「初心者のためのテニス教室」「児童心理療法のフロンティア」「TOEIC受験対策」「オペラのアリアを歌う」「幼児体育」「初心者のパソコン」「東西の生死観」「中級者のためのパソコン教室」「大人のためのピアノ教室」「郷土史」「英会話（初級・中級クラス）」「篆刻入門」「油絵をみる」などの講座が上位を占めている。3年間継続されていない講座や、定員数が若干名という設定から充足率を計算できない講座もあるため一概にはいえないが、それらの講座の特徴は、英語や心理学、コンピュータ関係と趣味的な分野であるといえる。特に英語やコンピュータ関係は実用的な講座であるといえる。

表3は、公開講座の収支一覧である。それぞれ1998～2000年度の講座名とその収入、支出および収支金額を示している。また、それぞれの年度の収支

表 1. 公開講座の充足率一覧 (1998~2000年度)

講座名 (1998)	定員	受講者数
初心者のための テニス教室	30	34
	充足率	113.3%
初心者用のパソコン	25	26
	充足率	104.0%
英会話 (初級・中級クラス)	32	32
	充足率	103.1%
大人のためのピアノ教室	14	14
	充足率	100.0%
TOEIC受験対策	20	19
	充足率	95.0%
東西の死生観	100	93
	充足率	93.0%
オペラのアリアを歌う	12	12
	充足率	75.0%
英会話 (高校生クラス)	16	10
	充足率	62.5%
郷土史	100	61
	充足率	61.0%
油絵をみる	30	18
	充足率	60.0%
TOEFL受験対策	15	8
	充足率	53.3%
心理療法	200	106
	充足率	53.0%
女声コーラスと オペラを楽しむ	50	38
	充足率	47.5%
児童文学への招待	100	46
	充足率	46.0%
マスコミ講座	100	44
	充足率	44.0%
親子のパソコン教室	40	17
	充足率	42.5%
保育実践	100	41
	充足率	41.0%
スポーツパフォーマンス 向上	50	20
	充足率	40.0%
第1回子育て実践 (前期)	100	39
	充足率	39.0%
子育て実践 (後期)	200	78
	充足率	39.0%
神戸学 I	100	34
	充足率	34.0%
現代の親子関係を考える	200	29
	充足率	32.5%
会津ハル一論	100	29
	充足率	29.0%
神戸 II	100	26
	充足率	26.0%
彫刻	30	7
	充足率	23.3%
人間学	100	17
	充足率	17.0%
日本画入門	30	5
	充足率	16.7%
現代のこどもを考える	200	27
	充足率	13.5%
演奏会	27	27
	充足率	5.4%
幼児体育	若干名	32
	充足率	—
講演と映画の会「学校Ⅲ」	—	—
	充足率	—
特別講演会 「紙のはじまりと芭蕉の紙」	—	—
	充足率	—

講座名 (1999)	定員	受講者数
TOEIC対策講座	30	41
	充足率	136.7%
オペラのアリアを歌う	14	14
	充足率	116.7%
初心者のためのパソコン 教室 (後期)	25	29
	充足率	116.0%
郷土史	100	115
	充足率	115.0%
子育て実践 (前期)	30	34
	充足率	113.3%
篆刻入門	30	33
	充足率	110.0%
初心者のためのパソコン 教室 (前期)	25	26
	充足率	104.0%
大人のためのピアノ教室 (前期)	14	14
	充足率	100.0%
大人のためのピアノ教室 (後期)	13	13
	充足率	92.9%
心理療法の フロンティア I	200	163
	充足率	81.5%
日本画入門	30	23
	充足率	76.7%
臨床心理学の フロンティア	200	140
	充足率	70.0%
彫刻とやきもの	21	21
	充足率	70.0%
大学生・社会人のための 初級・中級英会話教室	32	22
	充足率	68.8%
子育て実践 (後半)	60	38
	充足率	63.3%
ひょうご講座	24	24
	充足率	60.0%
木版画入門	30	18
	充足率	60.0%
高校生のための 英会話教室	16	9
	充足率	56.3%
親子のパソコン教室	40	22
	充足率	55.0%
映画の会	260	100
	充足率	52.0%
生命を考える	50	52
	充足率	52.0%
マスコミ講座	100	50
	充足率	50.0%
女声コーラスを楽しむ (前期)	60	40
	充足率	50.0%
心理療法の フロンティア II	200	89
	充足率	44.5%
神戸学 II	100	41
	充足率	41.0%
女声コーラスを楽しむ (後期)	80	31
	充足率	38.8%
児童文学への招待	100	23
	充足率	23.0%
子どもの現在と未来	200	40
	充足率	20.0%
幼児体育	若干名	67
	充足率	—
提携高校情報	—	—
	充足率	—
提携高校英語	—	—
	充足率	—
すずらんホール (演奏会)	—	—
	充足率	—

講座名 (2000)	定員	受講者数
児童心理療法の フロンティア	50	70
	充足率	140.0%
TOEIC受験対策講座	30	41
	充足率	136.7%
オペラのアリアを歌う	12	12
	充足率	133.3%
幼児体育	40	48
	充足率	120.0%
初心者のためのパソコン 講座 (前期)	29	29
	充足率	116.0%
中級者のためのパソコン 講座	25	28
	充足率	112.0%
大人のためのピアノ教室	14	14
	充足率	100.0%
子育て実践 (前期)	30	30
	充足率	100.0%
篆刻入門 (前期)	29	29
	充足率	96.7%
大人のためのピアノ教室 (後期)	14	14
	充足率	92.9%
郷土史	100	89
	充足率	89.0%
ひょうご講座	33	33
	充足率	82.5%
高齢化社会での生き方	50	40
	充足率	80.0%
初心者のためのパソコン 講座 (後期)	25	25
	充足率	72.0%
神戸学 IV	50	35
	充足率	70.0%
源氏物語アフレカト	100	68
	充足率	68.0%
女声コーラスを楽しむ	40	40
	充足率	66.7%
篆刻入門 (後期)	30	30
	充足率	56.7%
臨床心理学の フロンティア	200	109
	充足率	54.5%
日本画入門	30	12
	充足率	48.0%
子育て実践 (後期)	200	92
	充足率	46.7%
心理療法の フロンティア I	200	83
	充足率	41.5%
彫刻とやきもの入門	30	12
	充足率	40.0%
心理療法の フロンティア II	200	65
	充足率	32.5%
スピリチュアリティと 臨床心理学	200	56
	充足率	28.0%
親子のパソコン教室	40	5
	充足率	12.5%
木版画入門	30	6
	充足率	16.7%
マスコミ講座	11	11
	充足率	110.0%
講演と映画の会 (前期)	—	—
	充足率	—
講演と映画の会 (後期)	—	—
	充足率	—

金額の合計と文部科学省補助金、最終的な収支の総計を載せている。

表4は、1998～2000年度のそれぞれの講座を収支額の高いものから順位付けし、3年間の順位の平均値が高いものから順に並べたものである。

表4からみると、「油絵をみる」「幼児体育」「東西の死生観」「源氏物語アラカルト」「中級者のためのパソコン教室」「TOEIC 受験対策」「ひょうご講座」「初心者のためのテニス教室」「郷土史」「英会話（初級・中級クラス）」「心理療法」「彫刻」などの講座が上位を占めている。表2と同様に3年間継続されていない講座があり収支の3年間の平均順位が性格に算出できないため、一概にはいえないが、趣味・教養的な講座の収支額が高くなる傾向にあるといえる。3年間継続している

講座をみると「幼児体育」「TOEIC 受験対策」「郷土史」「心理療法」となっており、これらの講座は、いわゆる座学でレクチャー中心のものである。つまり、一度に収容できる学生数が多いという特徴がある。そのような講座は黒字になりやすいといえるだろう。

次に表5は、専任教員の公開講座への協力度を見たものである。K大学は文学部一学部であり、人間科学科、英米文学科、国文科、児童教育学科の

表2. 過去3年間の公開講座の充足率によるランキング表

(3年間<1998～2000年>の平均値の上位よりランク付け)

講座名	1998	1999	2000	AV
1 初心者のためのテニス教室	1	—	—	1.0
2 児童心理療法のフロンティア	—	—	1	1.0
3 TOEIC受験対策	5	1	2	2.7
4 オペラのアリアを歌う	7	2	3	4.0
5 幼児体育	×	×	4	4.0
6 初心者用のパソコン	2	7・3	5・14	5.5
7 東西の死生観	6	—	—	6.0
8 中級者のためのパソコン講座	—	—	6	6.0
9 大人のためのピアノ教室	4	8・9	7・10	7.0
10 郷土史	9	4	11	8.0
11 英会話（初級・中級クラス）	3	14	—	8.5
12 篆刻入門	—	6	9・18	9.0
13 油絵をみる	10	—	—	10.0
14 第1回子育て実践（前期）	19	5	8	10.7
15 TOEFL受験対策	11	—	—	11.0
16 英会話（高校生クラス）	8	18	—	13.0
17 高齢化社会での生き方	—	—	13	13.0
18 ひょうご講座	—	16	12	14.0
19 臨床心理学のフロンティア	—	12	19	15.5
20 源氏物語アラカルト	—	—	16	16.0
21 保育実践	17	—	—	17.0
22 心理療法	12	10・24	22・24	17.3
23 スポーツパフォーマンス向上	18	—	—	18.0
24 女声コーラスとオペラを楽しむ	13	23・26	17	18.2
25 子育て実践（後期）	20	15	21	18.7
26 日本画入門	27	11	20	19.3
27 親子のパソコン教室	16	19	26	20.3
28 彫刻	25	13	23	20.3
29 児童文学への招待	14	27	—	20.5
30 神戸学	21・24	25	15	20.8
31 生命を考える	—	21	—	21.0
32 マスコミ講座	15	22	28	21.7
33 現代の親子関係を考える	22	—	—	22.0
34 木版画入門	—	17	27	22.0
35 会津ハル論	23	—	—	23.0
36 講演と映画の会	×	20	29・30	24.8
37 スピリチュアリティと臨床心理学	—	—	25	25.0
38 人間学	26	—	—	26.0
39 現代のこどもを考える	28	—	—	28.0
40 子どもの現在と未来	—	28	—	28.0
41 演劇会	29	×	—	29.0
特別講演会	×	—	—	—
提携高校情報	—	×	—	—
提携高校英語	—	×	—	—

×：充足率計算不能
—：該当講座なし

表 3. 公開講座の収支一覧 (1998～2000年度)

講座名 (1998)	(円)	講座名 (1999)	(円)	講座名 (2000)	(円)
英会話 (初級・中級クラス)	収入 660,000 支出 406,000 収支 254,000	TOEIC対策講座	収入 522,000 支出 261,479 収支 260,521	TOEIC受験対策講座	収入 498,600 支出 264,800 収支 233,800
油絵をみる	収入 540,000 支出 387,000 収支 153,000	心理療法の フロンティアⅠ	収入 307,000 支出 126,666 収支 180,334	ひょうご講座	収入 264,000 支出 120,960 収支 143,040
彫刻	収入 230,000 支出 317,000 収支 -47,000	幼児体育	収入 268,000 支出 106,600 収支 161,400	幼児体育	収入 240,000 支出 99,900 収支 140,100
東西の死生観	収入 186,000 支出 238,000 収支 -50,000	日本画入門	収入 430,000 支出 271,944 収支 158,056	源氏物語アラカルト	収入 252,000 支出 150,000 収支 102,000
幼児体育	収入 95,000 支出 151,000 収支 -55,000	彫刻とやきもの	収入 273,332 支出 136,666 収支 136,666	中級者のためのパソコン 講座	収入 223,500 支出 157,339 収支 66,161
心理療法	収入 212,000 支出 276,000 収支 -64,000	郷土史	収入 360,000 支出 220,898 収支 139,102	心理療法の フロンティアⅠ	収入 203,000 支出 138,692 収支 64,308
初心者のための テニス教室	収入 102,000 支出 175,000 収支 -73,000	木版画入門	収入 124,102 支出 298,164 収支 -174,062	篆刻入門 (前期)	収入 261,000 支出 13,891 収支 247,109
児童文学への招待	収入 74,000 支出 170,000 収支 -96,000	子育て実践 (後期)	収入 75,000 支出 39,000 収支 36,000	郷土史	収入 222,338 支出 44,662 収支 177,676
親子のパソコン教室	収入 51,000 支出 154,000 収支 -103,000	初心者のためのパソコン 教室 (後期)	収入 261,000 支出 227,100 収支 33,900	初心者のためのパソコン 講座 (前期)	収入 255,000 支出 36,000 収支 219,000
郷土史	収入 288,000 支出 -105,000 収支 393,000	ひょうご講座	収入 145,000 支出 121,960 収支 23,040	臨床心理学の フロンティア	収入 288,500 支出 269,076 収支 19,424
マスコミ講座	収入 88,000 支出 198,000 収支 -110,000	大人のためのピアノ教室 (前期)	収入 112,000 支出 96,000 収支 16,000	初心者のためのパソコン 講座 (後期)	収入 162,000 支出 27,000 収支 135,000
大人のためのピアノ教室	収入 56,000 支出 173,000 収支 -117,000	臨床心理学の フロンティア	収入 280,000 支出 267,776 収支 12,224	児童心理学のフロン ティア	収入 175,000 支出 157,101 収支 17,899
講演と映画の会「学校Ⅱ」	収入 0 支出 121,100 収支 -121,100	大人のためのピアノ教室 (後期)	収入 104,000 支出 96,000 収支 8,000	大人のためのピアノ教室 (前期)	収入 98,000 支出 15,000 収支 83,000
特別講演会 「紙のはじまりと芭蕉の紙」	収入 0 支出 137,000 収支 -137,000	初心者のためのパソコン 教室 (前期)	収入 234,000 支出 226,890 収支 7,110	子育て実践 (前期)	収入 15,000 支出 15,000 収支 0
TOEIC受験対策	収入 243,200 支出 381,000 収支 -137,800	心理療法の フロンティアⅡ	収入 178,000 支出 173,101 収支 4,899	大人のためのピアノ教室 (後期)	収入 200,000 支出 95,000 収支 105,000
人間学	収入 34,000 支出 194,000 収支 -160,000	大学生・社会人のための 初級・中級英会話教室	収入 440,000 支出 444,444 収支 -4,444	日本画入門	収入 233,000 支出 227,461 収支 5,539
女声コーラスとオペラを 楽しむ	収入 95,000 支出 257,000 収支 -162,000	児童文学への招待	収入 45,000 支出 60,000 収支 -15,000	心理療法の フロンティアⅡ	収入 162,500 支出 173,101 収支 -10,601
会津八景	収入 58,000 支出 232,000 収支 -174,000	親子のパソコン教室	収入 45,500 支出 64,200 収支 -18,700	篆刻入門 (後期)	収入 119,000 支出 139,972 収支 -20,972
神戸学Ⅰ	収入 68,000 支出 253,000 収支 -185,000	高校生のための 英会話教室	収入 100,000 支出 131,288 収支 -31,288	女声コーラスを楽しむ	収入 122,250 支出 22,250 収支 100,000
現代の親子関係を考える	収入 130,000 支出 316,000 収支 -186,000	マスコミ講座	収入 100,000 支出 140,132 収支 -40,132	子育て実践 (後期)	収入 75,000 支出 23,000 収支 52,000
神戸Ⅱ	収入 52,000 支出 245,000 収支 -193,000	女声コーラスを楽しむ (前期)	収入 80,000 支出 134,914 収支 -54,914	彫刻とやきもの入門	収入 249,000 支出 22,250 収支 226,750
英会話 (高校生クラス)	収入 100,000 支出 193,000 収支 -93,000	女声コーラスを楽しむ (後期)	収入 62,000 支出 120,000 収支 -58,000	親子のパソコン教室	収入 25,000 支出 60,000 収支 -35,000
TOEFL受験対策	収入 302,000 支出 202,000 収支 100,000	神戸学Ⅲ	収入 82,000 支出 141,441 収支 -59,441	神戸学Ⅳ	収入 99,500 支出 141,392 収支 -41,892
現代のこどもを考える	収入 80,000 支出 296,000 収支 -216,000	子育て実践 (前期)	収入 102,000 支出 166,836 収支 -64,836	オペラのアリアを歌う	収入 160,000 支出 210,000 収支 -50,000
保育実践	収入 54,000 支出 287,000 収支 -233,000	オペラのアリアを歌う	収入 166,836 支出 54,836 収支 112,000	スピリチュアリティと 臨床心理学	収入 140,000 支出 216,283 収支 -76,283
子育て実践 (後期)	収入 123,000 支出 384,000 収支 -261,000	提携高校情報	収入 14,000 支出 205,000 収支 -191,000	マスコミ講座	収入 27,500 支出 140,772 収支 -113,272
初心者パソコン	収入 241,000 支出 121,000 収支 120,000	子どもの現在と未来	収入 0 支出 75,000 収支 -75,000	木版画入門	収入 100,000 支出 166,664 収支 -66,664
第1回子育て実践 (前期)	収入 384,000 支出 130,000 収支 254,000	生命を考える	収入 72,000 支出 157,061 収支 -85,061	高齢化社会での生き方	収入 100,000 支出 289,900 収支 -189,900
オペラのアリアを歌う	収入 274,000 支出 113,000 収支 161,000	提携高校英語	収入 244,900 支出 83,400 収支 161,500	講演と映画の会 (後期)	収入 0 支出 269,885 収支 -269,885
演奏会	収入 45,000 支出 384,000 収支 -339,000	篆刻入門	収入 111,110 支出 111,110 収支 0	講演と映画の会 (前期)	収入 132,000 支出 462,748 収支 -330,748
スポーツパフォーマンス 向上	収入 27,000 支出 365,000 収支 -338,000	すずらんホール (演奏会)	収入 272,024 支出 140,024 収支 132,000	計	収入 495,467 支出 3,500,000 収支 -3,004,533
日本画入門	収入 60,000 支出 441,000 収支 -381,000	映画の会	収入 200,000 支出 200,000 収支 0	文部科学省補助金	収入 0 支出 3,500,000 収支 -3,500,000
	収入 150,000 支出 616,000 収支 -466,000		収入 293,000 支出 293,000 収支 0	総計	収入 3,004,533 支出 0 収支 3,004,533

計	-5,108,900
文部科学省補助金	2,100,000
総計	-3,008,900

計	-180,259
文部科学省補助金	1,700,000
総計	1,519,741

4 学科がある。図 1～4 は、各学科における、専任教員の公開講座への協力度と、社会人入学・編入学者数をグラフ化したものである。

まず、人間科学科には心理学系、福祉学系、社会教育系があり、受験生の人気も高く、他の学科に比較して安定した入学人数を確保している。そのためか、人間科学科の専任教員の公開講座への協力度は平均すると50%を保っている。

英米文学科および国文学科は、最近3年間で受験人数が急速に減少している状況にある。そのため危機感を持っている専任教員らの、公開講座への協力度は上昇してきている。しかし、英文学科については、開講できる公開講座がTOEICの受験対策などと

いった語学関係のものに限定されており、講座の種類を増やすことができずに限界を感じているといった現状がある。また、高校生を対象にした語学教室の開講などもおこなっているが、それらのことが必ずしも大学への志願者数を増加させることにはつながっていないという。

児童教育学科については、専任教員の協力度は概ね55%を保っている。オペラ、ピアノ、絵画などといった趣味・芸術関係から、親子のパソコンなどの技能系、さらに幼児体育や子育て支援、教育相談など幅広い分野での講座

表 4. 過去3年間の公開講座の収支によるランキング表

(3年間<1998～2000年>の平均値の上位よりランク付け)

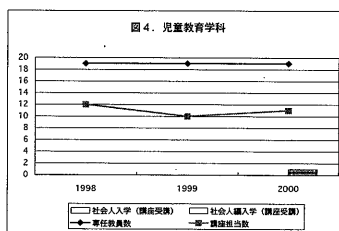
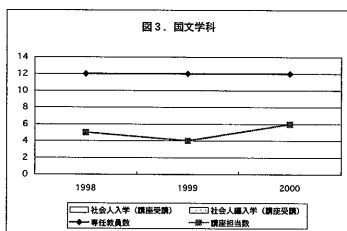
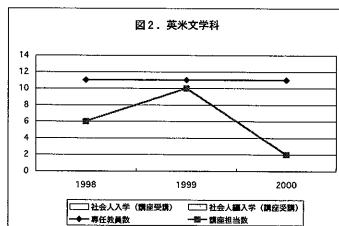
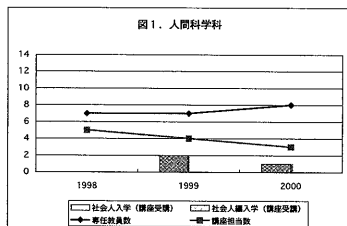
講座名	1998	1999	2000	AV.
1 油絵をみる	2	—	—	2.0
2 幼児体育	5	3	3	3.7
3 東部の死生観	4	—	—	4.0
4 源氏物語アラカルト	—	—	4	4.0
5 中級者のためのパソコン講座	—	—	5	5.0
6 TOEIC受験対策	15	1	1	5.7
7 ひょうご講座	—	10	2	6.0
8 初心者のためのテニス教室	7	—	—	7.0
9 郷土史	10	6	8	8.0
10 英会話 (初級・中級クラス)	1	16	—	8.5
11 心理療法	6	2・15	6・17	8.7
12 彫刻	3	5	21	9.7
13 臨床心理学のフロンティア	—	12	10	11.0
14 児童心理療法のフロンティア	—	—	12	12.0
15 児童文学への招待	8	17	—	12.5
16 大人のためのピアノ教室	12	11・13	15・13	12.7
17 特別講演会	14	—	—	14.0
18 人間学	16	—	—	16.0
19 初心者のパソコン	27	14・9	9・11	16.2
20 親子のパソコン教室	9	18	22	16.3
21 木版画入門	—	7	27	17.0
22 日本画入門	32	4	16	17.3
23 会津八一塾	18	—	—	18.0
24 子育て実践 (後期)	26	8	20	18.0
25 マスコミ講座	11	20	26	19.0
26 女声コーラスとオペラを楽しむ	17	21・22	19	19.2
27 現代の親子関係を考える	20	—	—	20.0
28 英会話 (高校生クラス)	22	19	—	20.5
29 篆刻入門	—	30	7・18	21.3
30 神戸市	19・21	23	23	22.0
31 第1回子育て実践 (前期)	28	24	14	22.0
32 講演と映画の会	13	32	29・30	22.5
33 TOEFL受験対策	23	—	—	23.0
34 現代のこどもを考える	24	—	—	24.0
35 保育実践	25	—	—	25.0
36 スピリチュアリティと臨床心理学	—	—	25	25.0
37 オペラのアリアを歌う	29	25	24	26.0
38 提携高校情報	—	26	—	26.0
39 子どもの現在と未来	—	27	—	27.0
40 生命を考える	—	28	—	28.0
41 高齢化社会での生き方	—	—	28	28.0
42 提携高校英語	—	29	—	29.0
43 演奏会	30	—	—	30.0
44 スポーツパフォーマンス向上	31	—	—	31.0

—: 該当講座なし

表5. 人的寄与率と学科別入学者の関係

		1998						1999						2000					
		専任教員数	講座担当教員数	寄与率	定員数	入学数	倍率	専任教員数	講座担当教員数	寄与率	定員数	入学数	倍率	専任教員数	講座担当教員数	寄与率	定員数	入学数	倍率
文学部	人間科学科	7	5	71.4%	399	100	4.0	7	4	57.1%	618	100	6.2	8	3	37.5%	505	100	5.1
	英文文学科	11	6	54.5%	453	110	4.2	11	10	90.9%	281	110	2.6	11	2	18.2%	208	95	2.2
	国文学科	12	5	41.7%	655	110	6.0	12	4	33.3%	328	110	3.0	12	6	50.0%	246	110	2.2
	児童教育学科	19	12	63.2%	1038	150	6.9	19	10	52.6%	836	150	5.6	19	11	57.9%	854	150	5.7
		1998						1999						2000					
		入学人数	うち公開講座受講生	受講した公開講座の曜日	入学人数	うち公開講座受講生	受講した公開講座の曜日	入学人数	うち公開講座受講生	受講した公開講座の曜日	入学人数	うち公開講座受講生	受講した公開講座の曜日	入学人数	うち公開講座受講生	受講した公開講座の曜日	入学人数	うち公開講座受講生	受講した公開講座の曜日
社会人入学	社会人入学 (講座受講)	0	0		4	1	心曜 (2)	1	0		4	1	心曜	1	0		4	1	心曜
	社会人編入学	0	0		1	0		1	0		1	0		1	0		1	0	
社会人入学	社会人入学 (講座受講)	5	1	心曜	15	3	国文学 (13)・心曜 (3)・組織 (1)	14	3	心曜 (2)・国文学 (1)	14	3	心曜 (2)・国文学 (1)	14	3	心曜 (2)・国文学 (1)	14	3	心曜 (2)・国文学 (1)
	社会人編入学	0	0		0	0		0	0		0	0		0	0		0	0	

【人的寄与率と学科別社会人入学・編入学の関係】



を開設している。また、児童教育学科の志願者数は減少することなくほぼ6倍程度で安定している状態である。

大学としては、公開講座の受講生を社会人入学や社会人編入学、科目等履修生に誘導する戦略をとりたいとしているが、表5からもわかるように上手く機能していない。

受講者の大きな傾向としていえることは、国文学系の公開講座を受講したものは源氏物語から平家物語などのように、古典の講座を継続的に受講するものの、他の講座への広がりがあり見られない傾向にある。例えるならば、「単線継続型」の学習といえる。これらの受講生は、国文学系の科目等履修生につながる場合はあるが、さらに様々な科目を総合的に受講する社会

人入学にまではつながらないといえる。

心理学系の公開講座と、幼児教育系の公開講座の受講生は、周辺の関連講座にも受講を拡大する傾向がみられる。今回の調査では社会人入学者数自体が少数であるため明確なことはいえないが、「拡大型」の学習を志向するため、社会人入学につながる可能性をもっているといえるのではないだろうか。

5. 調査分析から

分析の結果から、公開講座の運営に関して、大学からの持ち出しが非常に大きいということがわかった。また、講座の人气が直接的に経営面には反映されない、受講者の定員数を多く設定できる講座ほど利益がある、といったことが明らかになった。そのため、少数の学習者のニーズに応えた講座よりも、例え学習者のニーズには十分に答えられていないが、多くの受講者を集客できる講座の設定へと流れてしまう可能性がある。加えて、補助金の問題もあげられる。文部科学省の私立大学への補助金は、日本私立学校振興・共済事業団を経て支出される。公開講座を開講している私立大学は、毎年11月に実施内容や各講座別の収支を報告しなければならない。しかし、その補助対象の項目が年々削減されている現状にある。例えば、講座を編成するための出張旅費、公開講座で使用する機材（スライド映写機、録音機など）の購入・維持費などの一般経費は補助対象外である。また、1998（平成10）年度より、公開講座の当日に、設営や受付、録音などの業務をするアルバイト職員の経費も補助の対象外となっている。

つまり、公開講座を開催し、その講座数が増加すればするほど、大学の負担も増加するという現状がある。公開講座に関する全国調査によると、公開講座に関わる全支出経費のうち公的助成金が占める割合は、約14%であるという結果になっている。つまり、全体の約86%は主催者である大学の負担となっているのが現状である。

その他、大学の公開講座を支えるシステムの問題があげられる。公開講座の実施している学内のシステムを大別すると、①大学や学校法人を軸として全学的な意思決定と、実施する組織を持っている場合、②研究所や学部・学科などの特定の集団が意思決定と実施をしている場合の2つに分かれる。ま

たさらに、①において、専門の組織を持つ場合と、兼務職員などで全てをまかなう専門組織を持たない場合とに分けられる。K大学の場合は、1997（平成9）年に「生涯学習センター」が創設されるまでは、兼務職員などで公開講座に関する業務をまかになってきた。そのため、年度により担当者が変わり、前年度までの資料の引継ぎや、業務の確認作業が滞ることが頻繁にあったという。今回の調査に関していえば、公開講座に関連する資料を調査したが、1997（平成9）年以前のは断片的であり、整理された資料が見当たらない状態であった。事実、現在の生涯学習センターの担当者もそのことに頭をかかえている。業務の引継ぎなどが完全でない上に、少人数の職員で、大量の業務をこなさないといけないので、未整理の資料に手がつけられない状態であるとのことであった。

次に、全教職員の公開講座に対する意識の問題もあげられる。公開講座は大学における研究活動や教育活動、一般の業務とは異なる「余分なもの」、「付加的なもの」といった意識が根強く残っているといえる。そのことが、公開講座の運営を学内の一セクションの業務として限定し、全学的な活動とは程遠いものにする原因だといえるだろう。加えて、公開講座を担当する講師への評価も重要である。公開講座を担当することを活動業績として正当に評価されないのであれば、ますます大学公開講座の内容水準は、低下していくことにもなりかねない。

6. まとめ

生涯学習としての大学開放に関心を持ち、公開講座の開設などを中心に、大学を社会人に開いていくことがそれぞれの大学において進められている。生涯学習審議会の答申「新しい情報通信技術を活用した生涯学習の推進方策について」によると、1997年度で公開講座を開設している大学は、549大学で、講座数は合計10,086講座にもおよんでいる。

しかし、全ての大学において、この分野に豊富な歴史的蓄積があるとはいえない。そのため、実践を試行錯誤で行うことになり、大学開放への熱意・意欲と、実践面での問題点との乖離に困惑する場合が多い。その例として、「多様な公開講座を開設すると採算がとれない」、「社会人に対して大学院を開いても学生が集まらない」などである。また、受講生の側からも、「大学

の生涯学習とはこの程度のものか」といった失望も聞かれる。こうしたことは大学開放の健全な発達を阻害するものであろう。

そのような基本的な問題を集約し、香川正弘¹⁾は「第1は、なぜ大学開放をしなくてはならないのか、という哲学的根拠が明確にされていないという問題、第2は、大学開放は大学の機能のどこに位置付くのかという問題、第3は、大学は生涯学習のどの分野を担うべきなのかという問題である。」と3点を述べている。これらの指摘は、今回の調査結果についてもあてはまるといえる。大学が意図するような投資効果を公開講座があげていない理由として、香川が指摘するような問題点を、大学内で十分に検討しておらず、目の利益を優先させる傾向にあることが考えられる。つまり、真に学習者のニーズに応えた公開講座を開設するより、内容をより一般化し、受講生の増加が図れるような講座の開講に流れてしまうということである。そのため、学習の継続にも意欲的で、高度な学習要求を持つ学習者のニーズは満たされず、更に社会人入学などで学習を続けるという意志が減退させられる結果となっているのではないだろうか。

その問題点を解決する方策のひとつに、公開講座に連動した研究会の発足が考えられる。公開講座の内容をより高度に保つために、題材に関する研究会の成果を生かすのである。そのことにより、学習者の高度な学習要求に十分に対応できるといえる。また、公開講座を担当する教員としても、研究の場が得られることになり、研究業績の蓄積にもつながる。また最新の研究を公開講座を通して学習者に還元することも可能となる。また、大学における公開講座の位置付けもより明確になるのではないだろうか。大学の持つ高度な研究機能を生かしつつも、潜在的な学習者に対する動機付けと地域社会への研究成果の還元が可能になるからである。

加えて、大学における公開講座のあり方について、生涯学習審議会の答申が、ひとつの示唆を与えている。生涯学習審議会の答申「新しい情報通信技術を活用した生涯学習の推進方策について」では、公開講座のあり方について、「従来から公開講座を開催するなど地域に開かれた高等教育機関としての機能を果たすとともに、社会人特別選抜や科目等履修生制度、昼夜開講制の実施などを通じて広く社会人のための学習機会を提供し、生涯学習機会として積極的な役割を果たしています。今後は衛星通信やインターネットなど

を活用して、広く全国に高度な学習機会を提供するなど、より一層地域に開かれた高度な学習機会の提供拠点としての役割を果たし、高度化した学習者の学習需要に十分に対応できるようにすることが重要」と述べられている。つまり、衛星通信やインターネットという情報通信手段の活用も十分に考えられるのである。

また、放送を利用した大学公開講座の特性として、地域の特色や大学の個性を生かしたものを作り出せることとした上で、広瀬洋子²⁾は、「ここでは、中央発信型の放送大学とは異なる、ローカルな問題意識や特色を重視した地域密着型のテーマの開発が求められる。地域の固有の問題を見つめていった結果、それが実は地球上の普遍的な問題と結びつくといったダイナミズムをもつテーマもある。21世紀に向けて提唱される Think Globally, Act Locally の原点となるテーマを地域と大学が協力して探求していくことができる」と述べている。

本研究の調査対象であったK大学をはじめ多くの大学にとって、地域社会との関係が非常に重要である。特に、知名度がそれほど高くなく、多数の競争相手を持つ大学にとって、設置学部や教育課程の革新性だけでなく、入学者の最大の供給源である地域社会との関係は、大学の発展、存続にまで関わる大きな問題となる。今までの、いわゆる閉ざされた高等教育機関としての大学の時代は既に終わり、開かれた大学としてのあり方を問われている今日、地域社会との関係を問い直す必要に迫られているといえる。国際化が進展するなかで、大学における研究活動の水準も高度化している。その資源を地域社会に還元するという意味において、天野郁夫らが指摘するグローバルな大学のあり方が、今後の大学の方向性を示すものではないだろうか。

かつて大学は、高度な知識、技術、情報の限られた発信源のひとつであった。そのため地域社会においても、一目置かれた状況にあり、地域社会内部における知識、技術、情報の格差を利用し、啓蒙的な役割を担うことができた。しかし現在において、大学は地域における限られた情報発信の基地ではなくなりつつある。地域社会には、自治体や様々な企業による施設や機関が存在し、様々な情報の提供をおこなっている。加えて、パソコンなどの情報機器が発達し、インターネットカフェなど気軽に利用価値の高い情報を得ることができるアミューズメント複合施設も到る所に存在する。また、パソコ

ンを所有することが当たり前のようになり、自宅にしながら様々な情報を取得することができる。その他、日常生活で欠かすことのできない情報の提供物としてテレビやラジオが大きな役割を担っている。なかでもテレビは単なる娯楽番組だけでなく、ニュースや非常に専門的な情報を提供する番組が作成されている。加えて、2001（平成13）年秋からデジタル放送がはじまり、双方向通信が可能になってきている。

つまり、大学と同程度に、またはそれ以上に情報を提供するものが、日常生活において溢れている状況にあるといえる。つまり、大学と地域社会の関係は、対等平等の相互交流の段階にあり、その交流の場として、大学の社会サービス機能の重要性が大きく注目されているのである。だからこそ、大学の持つ独自性を最大限に生かした生涯学習機会のあり方を模索する必要がある。それは、他の機関には真似をすることができない、高度な研究の蓄積をはじめとした、教育資源を地域社会に還元することに他ならない。公開講座の内容は、最新の研究から裏付けされたものであり、望む学習者には講座内容と関連する研究会への参加も可能である、といった公開講座のあり方こそが大学らしいといえるのではないだろうか。なかには、大学での学習を希望し、社会人入学を希望する学習者も出てくるかもしれない。以上から、大学における公開講座の活路のひとつとしては、大学が提供できる最高水準の内容を維持することから見出せるといえる。

- 1) 香川正弘「大学開放の今日的課題」『平成12年度文部省調査研究 生涯学習の促進に関する研究開発』大学開放にかかわる研究委員会、2001、p14
- 2) 広瀬洋子「放送大学を利用した大学公開講座のテーマの特性」『研究報告第98号 放送利用の大学公開講座ハンドブック：次世代への継承』放送教育開発センター、1997、p13

【参考文献】

- 伊藤俊夫、山本恒夫編『生涯学習講座第1巻生涯学習推進体制の構築』第一法規出版、1989
- 佐藤守、稲生勁吾編『生涯学習講座第5巻生涯学習促進の方法』第一法規出版、1989

- 辻功、新井郁男編『生涯学習講座第3巻生涯学習援助の企画と経営』第一法規出版、1989
- 瀬沼克彰編『生涯学習ネットワーク化への挑戦』ぎょうせい、1990
- 瀬沼克彰著『生涯学習事業の最前線』教育開発研究所、1992
- 山田達雄編『生涯学習の知識ネットワーク』大学経理研究会、1993
- 島田修一編著『教育への挑戦5 生涯学習のあらたな地平』国土社、1996
- 山本慶裕編『生涯学習の現代的課題』財団法人全日本社会教育連合会、1996
- 瀬沼克彰著『生涯学習の新しい支援方策』教育開発研究所、1997
- 広瀬洋子「放送大学を利用した大学公開講座のテーマの特性」『研究報告第98号 放送利用の大学公開講座ハンドブック：次世代への継承』放送教育開発センター、1997
- 赤尾勝己著『生涯学習の社会学』玉川大学出版、1998
- 赤尾勝己、山本慶裕編著『学びのデザイン ―生涯学習方法論』玉川大学出版、1998
- 小野元之、香川正弘編著『広がる学び 開かれる大学』ミネルヴァ書房、1998
- 財団法人日本生涯学習総合研究所『高等教育機関における職業人の受け入れ拡充に関する研究開発』1998
- 生涯学習センター『生涯学習センター紀要（第1～4号）』神戸親和女子大学、1998～2001
- 天野郁夫著『大学－挑戦の時代』東京大学出版会、1999
- 村田治編著『関西学院大学総合教育研究室叢書。生涯学習時代における大学の戦略 ―ポスト生涯学習社会にむけて―』ナカニシヤ出版、1999
- 喜多村和之著『現代日本の私学高等教育…展望と課題 ―世界のなかの日本の私学―』日本私立大学協会附置私学高等教育研究所、2000
- 佐々木正治編著『21世紀の生涯学習』福村出版、2000
- M.トロウ著、喜多村和之編訳『高度情報社会の大学 ―マスからユニバーサルへ』玉川大学出版、2000
- 香川正弘「大学開放の今日的課題」『平成12年度文部省調査研究 生涯学習の促進に関する研究開発』大学開放にかかわる研究委員会、2001
- 総合研究開発機構、榛村純一編『社会を変える教育、未来を創る教育－21世紀の教育と生涯学習まちづくりの新局面』清文社、2001
- 中央教育審議会「生涯学習の基盤整備について（答申）」1990
- 生涯学習審議会「地域における生涯学習の充実方策について（答申）」1996
- 生涯学習審議会「新しい情報通信技術を活用した生涯学習の推進方策について（答申）」2000

